

ザーリヤとつちのいえ

2014～2016年

2014年10月にロンドンのRCAから交換留学で井上研究室にきたザーリヤ（建築／インテリアデザイン専攻）の研究テーマは、デザインの手で廃校を蘇らせるというものだった。

ブルガリア出身で、好奇心とヴァイタリティあふれる彼女は、ロンドンでは学べない土や竹など自然素材を用いたつちのいえの造形活動に積極的に飛び込み、学んだ版築技術などの知見を活かして、元崇仁小学校のリノベーション計画を修了制作としてRCAに提出し、優秀賞を獲得した。

2015年1月、京都を立つ直前に彼女から受けた質問は、「アキヒコ、ロンドンの土は使えるか?」だった。

ここでは、ザーリヤから届いた修了制作に関する報告を掲載する。



来てそうそう土間の三和土を試みる。(2014/10/9)



土間座でつちのいえメンバーと交流。すぐ打ち解ける。



茶庭隊といっしょに竹を探りに行く(2014/10/30)



3種類の土で三角形の版築サンプルをつくる(12/2)



留学生展でのザーリヤの作品の一部(2014年12月)

留学生展のための作品「eArth」のコメントで、ザーリヤは、タルコフスキーの詩を引用している。

「樹は成長しているとき、柔らかくて傷つきやすい。だが枯れて固くなると、樹は死ぬ。固さとかわばりは死の随行者だ。柔らかさと弱さは、存在のみずみずしさの表現である…」。

もろく壊れやすいが、何度でも再生できる土は、強固さよりも弱さとうつろいを尊ぶ彼女のサステイナブルな建築観に合ったのだろう。

ロンドンで修了制作を制作中のザーリヤ 2015年



パタシーの建設現場で土を採取する



版築で土壁のサンプルを制作する



できた版築サンプル

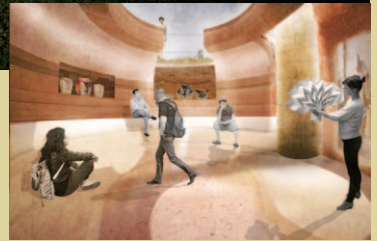
Zarya Vrabcheva, eArth transitions, 2015

A proposal for re-vitalizing the playground of an abandoned school in Kyoto to ceramics workshops, gallery and public spaces.
The School of Architecture, Royal College of Arts



ザーリアのRCA 修了制作
eArth transitions

京都の廃校の運動場を陶磁器
工房兼ギャラリー兼集いの場
として再生するデザインプラン



eArth transitions
2015

ザーリア・ヴラブチェバ
Zarya Vrabcheva

<https://zaryavrabcheva.com/earth-transitions>

うつろいのなかにあることが私たちの本来のあり方です。私たちが住まう空間もそうあるべきです。私のロイヤル・カレッジ・オブ・アート (RCA) の修了作品の根元にあるのは、インテリアとは「あいだ」としての空間であり、うつろいであり、それに関わる活動とともに変化する生きた有機体であるという考えです。

修士課程の2年目、私はRCAの交換留学制度で1セメスターを京都市立芸術大学で過ごしましたが、そこでの経験はこの批判的思考をさらに強化してくれました。滞在中、私は、土の可能性を押し広げ、土がサスティナブルで豊かな美しさをもつ建材であることをあらわにする共同制作に参加しました。建築プロセスを通じて、私は他の学生たちと交流し、身の回りにあるものに対する日本人の意識や、自然を敬う心に魅了されました。私は今もよく覚えています。最初の日、井上明彦先生が私を丘の上に連れて行き、つちのいえを見せてくれ、5分後には木のハンマーで土の地面をたたいたことを。つちのいえのメンバーとして過ごしたのは短い期間でしたが、そこで私は、どのように土地から土を集め、水とこね合わせ、日干しレンガをつくるのか、そしていつも私たちの足下にある土が少しずつ社会的空間へ成長していくのかをまのあたりにしました。

この大きな経験が刺激となって、RCAでの私のプロポーザルは、運動場に新しい陶磁器工房をつくり、元崇仁小学校の空間を活性化するというものへと発展しました。すでにある場所と材料を使い、地面の上と下の境界に新しい空間をさし込み、そこで人間の創造活動の原初の材料である土にもっとも近い陶磁器をつくるというものです。学習スペースや工房、施釉や焼成の設備、オーディトリウムと展示空間が版築の壁で形成されます。インテリアを彩るのは、さまざまな色・質感・形態の土の様相です。風景は、空虚を埋めるのではなく、ボリュームをうかがつことで室内空間をつくりだす彫刻的なマッサとして操作されます。この方法は、建物を時間と空間の中で進化・形成することを促し、文化的アイデンティティを保持しながら、将来の更新にも対応することを可能にします。

この介入的な空間デザインは、廃校と来たるべき芸術機関をつなぐものとなるのです。

村井農園

2015年度

2015年度前期も24名もの参加があり、各自の希望を出し合って、以下の複数の班で活動を進めた。

- 村井農園
- 足湯につかり隊
- 樹の上で昼寝し隊(前述)
- 近づき隊(継続・前述)
- のれんづくり

村井農園は、村井陽平(大学院プロダクトデザイン専攻)の提案により、つちのいえの丘の斜面に棚田(段畑地)をつくらうというものである。

作業に先立ち、棚田の風景で知られる越畑地区を訪れ、土地改良区の理事長からアドバイスをもらうなど、これまでにない計画的な取り組みが行われた。

村井農園は、村井陽平(大学院プロダクトデザイン専攻)の提案により、つちのいえの丘の斜面に棚田(棚段畑地)をつくらうという計画である。

【短期計画】

ホームセンターで直ぐに手に入るもの→夏の収穫祭へ赤シソ(ジュースに)、枝豆、キュウリ、トマト、ネギ、ナス、パプリカ、ヒマワリ、トウモロコシなど

【中期計画】各地から取り寄せて秋に向けて植える→秋の収穫祭へそば、サツマイモ、小豆、陸稲など



2015/4/16

オリエンテーションの様子。参加者が多い。このあと、土を捏ねたり塗ったりする体験学習を行うなかで、各自がやりたいことのイメージを培う。



2015/6/4

フィンランド人留学生のニンニ・マクリン(Ninni Maklin、陶磁器専攻)がおやつに珈琲ゼリーの差し入れ。つちのいえは午後3時からおやつ時間、気分転換とアイデア交換の大事な時間であり、作業後半の能率も上がる。大人数で座ることができる「土間座」が役に立つ。



つちのいえの丘の北斜面。



2015/5/14

越畑地区で棚田や栽培に適した穀物・野菜等について説明を受ける。



2015/6/4

丘の斜面の耕作に取りかかるが、草が予想以上に強く根をはっていて、鋤が折れるなど悪戦苦闘。大原野の大工の大五さんに農具を借りに行った。大五さんは、さまざまな農具を無償で貸してくれた。お借りしてきた鋤や鍬を使うと、どんどん耕作が進む。



地面はいくら掘っても粘土質の層に当たり、耕作に適さない。だが長年枯葉や枯れ草が積もった表土は活かせる。そこで、上方の地面の表土を1段目の棚に下ろして畝にするやり方を考案、上から下に土を下ろしつつ、耕地を広げていくことにする。足湯し隊 (p.164) が掘った土も再利用する。丘の上の土の循環的確保によって下から棚段を形成していく。



生育具合を確かめつつ植え付けと棚段づくりを進め、予定通り5段目まで達する。1段目 サツマイモとジャガイモ、春菊。2段目 野菜類 (トマト、キュウリ、ピーマン、枝豆、ナス、赤シソ、青シソ、水菜、トウモロコシなど)。3段目 小豆。4段目 蕎麦。5段目 陸稲。



つちのいえの丘は粘土の山。耕作に適した土は表土のみで、下には深い粘土の層が横たわる。だが、これはのちに陶土などへの活用につながる。



1段目の畝。メンバーの有吉かな子が実家から送ってもらったサツマイモの苗を仮植える。



2段目の畝は野菜類。育つ野菜と育たない野菜がはびきりしてくる。育つのは、トマト、キュウリ、ピーマン、枝豆、ナス、赤シソ、青シソ、トウモロコシなど。



3段目の畝には小豆を巻く。生命力が強く、台風で水浸しになっても元気に芽を出した。のちの大量収穫、ぜんざいづくりにつながる。

ニンニが、掘り起こした粘土を使って湯飲みを焼きあげた。低火度ではなく、1230度で焼いたという。内側には釉薬をかけ、立派な出来である。全員でマイカップを焼くワークショップをしようと話が盛り上がる。のち、ニンニは、修了制作にもつちのいえの丘の粘土を利用した。また井上も、のちの造形計画の授業で、楔形文字の実習用と同じ粘土を活用した。



さまざまな創作活動の機縁をもたらずつちのいえの丘全体が「芸術資源」なのだと思ふ。

「夏野菜類は予想通り結果が早く出ている、モチベーション維持にととても良いと思う。(…中略…) 穀類、小豆、イモなど秋の主食類はあまり手をかけていない割には葉が茂っており、植物の強さをしみじみと感じる。」(砥綿菜の報告より)



4段目の棚に植えた蕎麦は、8月には花が咲き、秋には実がなった。

掘り出した粘土の山で、陸稲がすくすく育つ。モチも成育がよかった。メンバーの中には蕎麦の花や実を見たことのない者も多い。蕎麦粉を打ったり、米を炊いたりするほどの量ではなかったが、穀物がつちのいえの丘で育つことがわかった。



5段目の棚に植えた陸稲は、秋には穂を垂れた。

収穫祭

11月19日、取れたサツマイモ(べにはるか)をいただく収穫祭を催す。村井が持参したフライパンは柳宗理のデザイン。手鍋としても使えるすぐれもので、韓国ツアーみやげのトウモロコシ茶も沸かした。



生育の早いキュウリの初収穫。ナスも同時期に収穫。 2015/ 7/23



小豆には虫が来ていたが、大丈夫そうな鞘を収穫してみると、立派な実ができていた。のれんを染めるとき、染織棟で炊いてゼンザイをつくった。





収穫祭の様子。お世話になっている教務学生課の方々に「イモが焼けました」と声をかけたら、課長以下、6人もの職員の方が来られました。



12月3日、タマネギ皮染め(→p.156)と並行して、村井農園班は、収穫した小豆を煮てぜんざいを作り、やきいもと合わせて食べる。

「つちのいえ」を通して学んだこと

村井 陽平

2015年度参加
2016年大学院デザイン科修士課程修了
2019年大学院美術専攻プロダクト・デザイン領域博士課程修了
札幌大谷大学美術学科情報・プロダクトデザイン専攻専任講師を経て、2021年より福井工業大学デザイン学科准教授

私が授業を履修した際、先生は何をやりたいのかは自分達で考えて提案して欲しいと仰られた。そこで私は、大学の敷地内に棚田を作りたいと申し出た。丘の上に原始的手法で作られた「つちのいえ」の周りには、その生活に纏わる畑があるべきだと考えたからである。

真夏の炎天下の中、虫に刺されないように作業服を着て、鍬で斜面を切り崩して土を耕した。作業をしていると汗が噴き出し、何で自分達はこんな事をしているのだろうかと思わずに考え、秋になると作物が実り、鳴門金時を焼き芋にした際は、感動に近い喜びがあった。また、我々を何度も阻んだ「粘土」を用いて、陶磁器を専攻する学生が食器を作ってきた際の衝撃は、今でも忘れられない。

現代を生きる我々は、完璧なまでに形状すら管理された農作物を、破格の値段で手にすることができる。しかし、そこには生産者の育てる際の苦勞や、土地を開拓して土壌を作った先人達の苦難は見えてこない。先生の授業は、つちのいえを介して異なる専攻・学年の学生が集まることで多様性を知り、学生自らが主体的に活動を行う中で、現代に当たり前とされている物事に対し、考えさせるものであったのではないだろうか。

「つちのいえ」の授業は、非常に大らかである。大学の地形を変えても怒られることなく、自身の身体を動かす中で、物事の根本から考えさせてくれる機会を提供してくれたからだ。そして、それが許容されていた大学の環境は、豊かである。この授業は、デザイン教育においても非常に重要である。何故なら、情報化社会になるに連れて自身の手足を動かさなくても情報が容易に手に入るようになり、パソコンの中だけでデザインが完結している場面が多く見受けられるからだ。そして、そこには本来デザインにおいて極めて重要な「実体験」が抜け落ちている。経験を通して得る知見こそが、何かを生み出す上でのオリジナリティに繋がる必要不可欠な要素であり、それを教えてくれたのがこの授業だ。



2015年11月5日、村井農園でサツマイモを収穫する。

タマネギ皮染め のれん で暖簾をつくる

2015年12月

12月3日、佐藤亜美(染織M2)をリーダーに、タマネギ皮染めでのれんづくりに取り組む。布屋根づくりのときと同様、染織棟の共同作業室を使わせていただく。綿布も染織専攻から30cm幅の厚みのある綿布を分けていただいた。作業にはつちのいえのメンバーだけでなく、染織専攻の留学生たちも参加した。

(つちのいえは、専攻を越えた開かれた交流がある京芸の環境に支えられている。)

タマネギの皮は、佐藤亜美が食堂に頼んで集めておいてもらったり、メンバーが持参したもの。きれいに染めるには、原則的に布と同量が必要。

下染も、彼女が先に豆汁こじでやっておいてくれた。試し染の布もきれいな黄色が出ていた。



2015/12/3

佐藤亜美による作業の説明。手前は集められたタマネギの皮。(染織棟共同作業室にて)



のれんの上の方は板締め絞りで、下の方は3種類の絞りで。染織専攻以外の学生はみな絞り染めは初めて。



染め液に浸す前にいったん水に浸す



板締めの棒が長過ぎて全体が浸からない。染めムラがひどくならないよう、動かしたり入れ替えたりする。



中国人留学生の徐さん持参の中国の草木染め紋様集を参考に。コンゴ人留学生のMbugha Meniも参加。



染め液はタマネギの皮の煮汁。





染め液から引き上げ、水洗いし、ミヨウバンの媒染液に浸す。これを2回繰り返す。

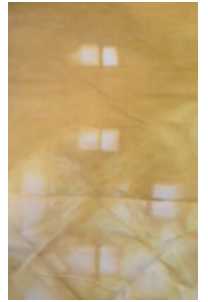
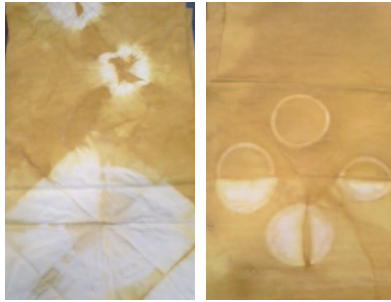


媒染液に浸すと、みるみる色が変わる。植物成分とミヨウバンのアルミイオンが結びついて発色する。

黄色い染め色も模様も、つちのいえに合うのれんができた。

12月10日、のれんをつちのいえ入口にかけてみる。予想どおり、大きな布の質感と色面は、つちのいえの空間の質を大きく変えた。空気に華やぎをもたらしただけでなく、入口を入れて土間座に至る右回りの動線をしっかりと導いた。

*のれんは、退色と傷みのため、現在ははずしている。



足湯につかり隊

2015年度



つちのいえ東側にある凹地から土や枝葉を掻き出す。



2015/6/25

穴掘りはハードな作業である。掘った土は、村井農園に提供し、畑地に活かす。

足湯につかり隊は、陶磁器専攻の北尾祥子と堂本真由らの提案により、つちのいえの脇に足湯を楽しむ場をつくらうとするものである。



2015/6/18

学内で拾った大きな金属トレイを湯船にすることに決める。



2015/6/25

地面に埋もれていたブルーシートを掘り起こして屋根にする。のちテント状に張り直し、極力、水が流れこまないようにした。

つちのいえの東側の森の入口に、かつて作品を配した跡と思われる大きな凹みがある。作業は、その凹みを埋める大量の枝葉や土を掻き出すことから始まった。



2015/6/25

凹地であるため、掘っても、雨水がたまりやすく、すぐに側壁や階段が壊れてしまう。それゆえ、作業期間中、屋根をかけ、周囲に溝を掘って、排水処理をすることが、足湯の装備をつくることと同様に大事になった。



木の枝で杭をつかって地面に打ち込み、階段をつくる。

作業はゆっくり進み、夏休みをはさんで後期も継続。年末に着火と初足湯、2016年2月の作品展のときに、他のつちのいえプロジェクトと共に一般公開した。

溝を掘り、日干レンガで火床と湯船の台座をつくる。



2015/7/2

凹地に降りる階段。



屋根のブルーシートを半透明の防水シートに代える。



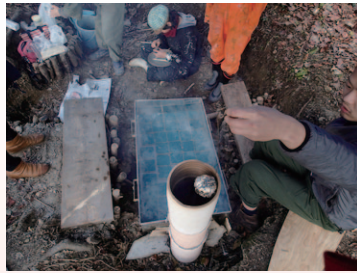
陶器の筒を重ねて煙突をつくる。湯船に水を入れて、火床の枯れ枝に火をつけると、良好な煙突効果ですぐお湯になった。足をやけどしないよう、学内で拾った青いタイルを底に敷きつめる。

足湯 一般公開

2016年2月13日(日)、作品展の最終日に、つちのいえ全体とともに足湯を一般公開した。



足湯班は陶磁器専攻らしく、4つの座イスも土を焼いてつかった。



12月17日、初めて火床に火を入れ、実際に足湯を試す。

しだいに寒さがきびしくなる丘の上で、豊かな自然に包まれながら、初めて裸足をお湯に入れたときは、形容しがたい喜びがあった。



公開日は雨だったが、シート屋根が役立ち、沓掛キャンパス初の足湯が実現した。学内外から来場者が多く、火床を利用してジャガイモを焼き、ジャガバターもふるまった。



ただし足湯公開はこの日限りとなった。